

新・21世紀への道 <その2>

ユニバーサル農業～地域のリソースをつなぐ農福連携

「ユニバーサル」には「普遍的な」とか「万人向けの」とか「誰でもできる」などの意味がある。障害を持つ人たちや高齢者を始めとして、さまざまな人たちが「担い手」となって、地域の人たちが地域の中で農業や福祉を支え合っていく、そんな明るくて夢のある、住みやすい「地元作り」をめざして活動を行っている。

社会参加や雇用機会（現金収入）の拡大を求める障害者や高齢者が存在する一方で、農業分野では農家の高齢化や担い手不足、耕作放棄地の増加等が問題となっている。このような両者を「農福連携」という形でマッチングさせて結びつけることによって、地域の中でお互いに支え合うより良いコミュニティを作ることが課題の解決につながると考えられる。

地元・静岡県袋井市で地域密着型の活動を模索していたところ、袋井市協働まちづくりセンター「ふらっと」の紹介で、新たに農福連携を始めようとしていた障害者福祉施設と出会ったのがきっかけで、2018年頃からこの活動を始めた。

ユニバーサル農業の実践の舞台として障害者施設近くの農家の畑や温室を借りて、ブドウ、藍、シイタケ、センリョウ等の栽培をしている。ブドウやセンリョウを販売して収益を得たり、原木シイタケの栽培をしている。また、栽培した藍を使った藍染め体験会や、6次産業化をめざして藍染め製品作りとその販売も計画している。

これまでのところ、ブドウ、藍、シイタケ、センリョウを4本柱とする栽培体系が確立されている。これらの作目は、栽培管理の手間や季節性も考慮に入れて、バランスの取れた4品目といえる。ブドウやセンリョウの販売によって、少額ではあるが現金収入を得ることができた。またそれに伴って、作業に参加してくれる障害者に工賃を支払うことができ、農福連携の一つの目標に一步近づくことができた。

ユニバーサル農場での農作業の支援のために、ボランティア的な「サポート隊」が結成されて、各種農作業が協力して行われている。空きハウスを活用したブドウやシイタケの栽培、農業後継者のいないセンリョウ畑の活用は、耕作放棄地や担い手不足への対応策の可能性を示しているといえる。

これまでの活動を通して、地域でユニバーサル農業を実施する基盤がある程度確立されてきた。これからは、既存のユニバーサル農場だけでなく、周辺の一般農家や耕作放棄農地等へも活動を広げたり、地域で活動に興味を持つ人たちともつながり、地域におけるユニバーサル農業を拡大していきたい。さらに、「農」と「福」のマッチングを行うための中間組織を設立し、地域におけるユニバーサル農業の発展を支えていきたい。

ユニバーサル農業の実践を通して、地域の中でより具体的で実現可能なしくみ作りをすることで、「農業良し」「福祉良し」「地域良し」の三方良しのつながりができれば、と考えている。時代は「グローバル」から「リジョナル」へ。これからの時代は、地域に根ざした、地域密着型の活動がますます重要になってくる、私たちはそう考えている。



藍染め体験会の様子



ユニバーサル農場のブドウ



シイタケ菌打ち作業



センリョウの収穫